

## <研究ノート>

# ロシアの民主化に関するカウツキーの見解について —*Der Bolschewismus in der Sackgasse* とダンあての三書簡から—

山 口 拓 美

### 目 次

はじめに

1. 1929年のダンあての書簡にみられるロシア民主化綱領について
2. 1930年の著書 *Der Bolschewismus in der Sackgasse* にみられるロシア民主化綱領について
3. カウツキーの国有企業改革論について

### はじめに

カール・カウツキーは、当時ベルリンにいたメンシェヴィキのテオドール・ダンにあてた1929年4月21日付の書簡の中で、27年に刊行された自身の著書『唯物史観』について簡単に言及した後、ロシアの民主化に関する自身の見解を次のように説きはじめている。

「ロシアが（あるいはむしろロシアの独裁が）破局へと向かって進んでいることは私には疑いの余地がない。いつどんなふうにも崩壊するかは、はっきりと予言することはできない。……いずれにせよ、ロシア人亡命社会主義者が、不意を襲われないためにあらゆるケースに備えておくなら、それはよいことである。」

こう記した後、カウツキーは、ボリシェヴィズムに対する反乱のプロセスや勝利した民主主義政権がとるべき産業政策等について、かなり詳細に自説を述べ、さらに4月30日付の書簡で民族政策を<sup>2</sup>、そして6月3日付の書簡では社会主義者内部でのセクト主義克服の必要性を縷説している<sup>3</sup>。ダンにあてたこれら三書簡の基本的な内容は、著書 *Der Bolschewismus in der Sackgasse*

の主要部分である第4章と第5章を構成し、1930年に出版された<sup>4</sup>。これは、カウツキーが1918年以来精力的に続けてきたボリシェヴィズム批判のいわば集大成とでもいうべきものであるが、しかし一方でこの『行き詰まったボリシェヴィズム』という表題は、おそらくある時期までは、多少滑稽な印象を持って迎えられていたのではないかと思われる。というのは、この書が出版された1930年という年は、農業集団化と第一次五カ年計画の実行の下で、ボリシェヴィズムがまさに行き詰まりを打開し「大躍進」を遂げようとしていた時期に当たっていたからである。しかし、1930年代に続いた農業集団化に伴う悲劇やスターリンによる大粛正等を勘案するなら、農民蜂起を発火点とする民主主義革命というもう一方の可能性に賭けたカウツキーのこの書は、むしろ歴史的文書として社会主義史上に重要な位置を与えられるべき作品である、といわなければならない。また、ソ連の崩壊を見届け、ロシアや中国の市場経済化という事態に直面しつつある今日、マルクス主義の立場からなされたカウツキーのソ連解体論は無視し得ない業績となっている。とりわけ彼の国有企業改革論は、1930年代初頭という時代を越えて、今日にも通じる普遍的な意義を持っているといえる。

そこで、本稿では、*Der Bolschewismus in der Sackgasse* とダンあての上記三書簡とを対比しつつ、そこで展開されたロシアの民主化に関するカウツキーの見解の本質的な論点について、主に国有企業改革論に焦点をあてながら再検討してみたい。その際、ダンあての書簡を特にここで取り上げる理由は、以下において見るように、幾つかの論点に関しては公刊された著書よりも同書簡においてより踏み込んだ見解が表明されており、そこに上記のテーマに関するカウツキーの主張の際だった特徴を見て取ることができると思われるからである。

## 1. 1929年のダンあての書簡にみられるロシア民主化綱領について

はじめにまず、ダンあての三書簡の主な内容を見ておきたい。

4月21日付の書簡は、それがダンにあてられたものであることから当然で

あるといえるが、まずロシア人亡命社会主義者の役割について取り上げている。カウツキーによれば、来るべきロシアの変革はロシア内部から生じなければならないのであって、亡命者が外部から暴動を引き起こすようなことはしてはならない。しかし、いったんボリシェヴィズムが崩壊したら、亡命社会主義者には重要な仕事が与えられる。というのは、ソビエト体制による抑圧によってロシアにはボリシェヴィキ後に国を指導できるような人々がいなくなっているからである。もし、現在亡命中の社会主義者と民主主義者が一致して事に当たらなければ、完全なカオスが生じるであろうとカウツキーはいう。

次に彼は、反ボリシェヴィキ革命の起点について、それが農民以外ではありえないことを述べ、新しいロシアが民主主義的な農民共和国になるであろうと予想する。しかしその際、ボリシェヴィズムが都市と農村との対立を拡大させているため、かかる共和国が反労働者的なものになる危険性があることから、新しい民主主義体制は、農村に工業製品を安く供給するための生産性の上昇と、都市に安く食料を供給するための農業の集約化とを進める必要があることを説いている。

それでは、新しい産業システムはどのようなものになるべきなのか。カウツキーは民主主義政権の行動綱領 (Aktionsprogramm) を、10枚から成る比較的長いこの書簡の中で、ある程度詳しく論じている。ここは本稿にとっても最も興味深い部分なので、以下に番号を付して要約しておきたい。

- ①まず、すぐにも実行できることは、自由な交通と移転の自由の導入、そして商業の国家独占の廃止である。
- ②関税は産業保護と国家収入の両方の理由で必要である。
- ③ボリシェビキによって国有化された産業の取り扱いが最大の問題である。「経済的大打撃を伴わずに一つの生産様式を正反対の生産様式に突然変えることはできない<sup>5)</sup>。」それゆえ、「1917年11月クーデター<sup>6)</sup>」後の国有化は経済的ナンセンスであったが、逆もまた同様である。さしあたりは国有産業を生産的なものにするよう引き続きやりくりしなければならない。しかし、産業の国家独占はすぐにも廃止され、あらゆる市民に私企業を設立し経営する権利を与え

なければならない。

④国有企業のうち単にローカルな必要にのみ役立つ部分は、大都市の自治体や協同組合に引き渡されるのがよい。彼らの方が国家官僚よりもよりよく経営するだろう。

⑤国有企業のうち国全体の必要に役立つ部分は、引き続き国家にとどまるべきであるが、国家官僚に対してはより大きな独立性を保持すべきである。

⑥国営企業に株式会社の形態を付与することは、試行してみる価値がある。株式の多数を握ることで国が公共的利益のために企業を統治し続ける必要があるが、株式の一部をその企業の労働者が取得することは、生産性にとってプラスになる。

⑦あらゆる努力にもかかわらず生産的にならなかった国有企業は、民間に売却せざるをえないであろう。

⑧鉄道、鉱山、森林はどんな場合でも国家所有であり続けるべきであろう。

さしあたり、以上が書簡の中で描かれた新しい民主主義政権のための産業システムに関する行動綱領の要約である。

次に、続いて書かれた4月30日付の書簡を見てみよう。これは5枚から成るもので、前書簡の直接的な続編であるが、そこでは民族問題（Nationalen Frage）についての行動綱領が述べられている。これは、多民族国家ソビエト・ロシアに不可欠の問題であり、カウツキー個人にとっても様々な意味で重要なテーマであったと思われる<sup>7</sup>。しかし、これに関しては、ごく簡単に要約しておくことにする。

旧ロシア帝国の内部に暮らす諸民族と国境に暮らす周辺諸民族とを区別しなければならない。周辺諸民族（Randvölker）、すなわちフィンランド、エストニア、ラトビア、リトアニア、ポーランド、グルジア、アゼルバイジャン、アルメニア、モンゴル、およびその他の中央アジアの諸民族については、そのすべてに等しく独立の権利を認める。しかし、ポーランドを別とすれば、これらの諸国は国内市場が未発達なので、関税同盟によってロシアと統合されるのがよいと思われる。一方、本来のロシア内部に暮らす非ロシア民族（nichtrus-

sischen Nationalitäten) は、独立国家を形成し得るまでには発達していないので、民主主義的自治を与える程度にとどめざるをえないだろう。また、ウクライナは、戦争防止等の理由からロシアと一つになっている方がよいと思われる。

最後に、6月3日付の書簡。これは著名な人物に関する個人的な回想が9ページにわたって綴られた興味深いものであるが、これについてもごく簡単に要約しておくことにする。

ロシア再建のためには、セクト主義 (Sektiererei) の克服が必要である。ロシア人はセクト主義の傾向が特に強い。一番強烈なのはボリシェヴィキだが、それ以外でもこの傾向から免れているのはアクセリロードくらいのもので、プレハーノフなどはこの傾向が強かった。ローザ・ルクセンブルクのようなロシア的条件下で成長した非ロシア人社会主義者もこの傾向が強い。戦時中 SPD から独立派を引き離したのは何よりも彼女の影響によるものだった。終戦の際、SPD がまとまっていれば幾つかの悲劇を回避することができたであろう。政治家は新しい状況の下では、古い時代の相違点を忘却しなければならない。ロシアの社会民主主義と民主主義の諸派は、革命と内戦の時代の相違点を忘れる必要がある。また、共産主義的労働者の獲得も重要である。しかし、あなたが言うような“ボルシェビズムの偏見との妥協”はしてはならない。共産主義者はプロレタリアートの独裁だけでなく、プロレタリアートに対する自分たちの党の独裁をも要求している。とはいえ、私は共産主義者と連立政権を作る可能性を十分に認識している。

さて、以上のような見解の基本的な内容は *Der Bolschewismus in der Sackgasse* の第4章と第5章に吸収されて公表されるに至る。そこで次に、同書で展開された主な論点を、これらの章を中心に見ておきたい。

## 2. 1930年の著書 *Der Bolschewismus in der Sackgasse* にみられるロシア民主化綱領について

カウツキーは *Der Bolschewismus in der Sackgasse* の第1章、第2章

および第3章で、農業、工業および政治の各領域における1917年以降の変化を検討し、その上で、スターリン指導下のボリシェヴィキ政権が「反革命」としての役割を演じてしまっていることを論証する。

「われわれはソビエト・システムをできる限り様々な角度から、すなわち経済的、社会的、政治的角度から検討した。しかしながらわれわれは、1917年3月からボリシェヴィキのクーデターにかけてロシア革命がすでに戦い取ったかもしくは道を切り開いたもの、そしてロシアとその労働者階級の速やかな向上の出発点になっていたであろうところのもの、これらを越える進歩を、どこにも見いだし得なかった。ボリシェヴィキがそれ以来付け加えたものは、確かに彼らの意図においては、というよりはむしろ彼らの慣用語法においては、何か圧倒的に素晴らしいものであった。現実には、それは、ボリシェヴィズムの権力掌握までに革命が成し遂げたあらゆるものの妨害、退縮、麻痺であることが判明した<sup>8</sup>。」

それでは、どうすればロシアに1917年3月革命の成果が、すなわち民主主義がもたらされるのであろうか。第4章からは、「ロシアとロシアの社会民主主義に課せられた任務<sup>9</sup>」が論じられる。

まず、体制の変革については、カウツキーは、ソ連の民主主義への平和的移行を否定し、可能性の高い変革の起点として農民蜂起を主張する。彼は、次のようにいう。「コルホーズの実験が頑固な農民暴動を惹起したので<sup>10</sup>」スターリンはそれにブレーキをかけざるをえなかったが、スターリンがもたらした災禍はやがて拡大された規模での農民蜂起を勃発させるであろう。しかし、農民蜂起がソビエト体制の転覆に成功したとしても、農民だけでは新しい民主主義国家の建設は不可能であり、農民が労働者および知識人と協同することが必要である。その際カウツキーは、労働者が見せかけの特権を放棄することが重要であることを特に強調している。

第5章では、はじめに、旧地主勢力が再び支配の座につく可能性の極めて低いことが詳説された後、社会主義および民主主義内部のセクト主義の問題が取り上げられる。その際カウツキーは大陸ヨーロッパの社会主義運動史を3つの



時期に分け、現段階におけるセクト主義克服の重要性を力説する。すなわち、フランス革命からパリ・コミュンまでの第1期は、与えられた経済的、政治的条件のためにプロレタリア大衆政党の発展が不可能な時期で、社会主義運動が小さな秘密結社に制限されるセクト主義の時代として特徴づけられる。しかし、60年代に民主主義が生命を取り戻すと、諸セクトが大衆政党へ移行する条件が生まれ、社会主義運動は第2期を迎える。この時期、軍事君主制の下で大衆政党はかつてセクトがそうであったように革命的であり、非妥協的反対を任務とし、ブルジョア反対派政党と労働者の支持を奪い合いつつ激しく対立していた。しかしながら、第一次世界大戦後、軍事君主制が覆され民主主義共和国が出現するや、プロレタリア政党の役割は大きく変わり、社会主義運動は第3期に移行する。ここでは、プロレタリア政党の任務は民主主義共和国を守ることであって、それを転覆することではない。というのは、プロレタリア政党のかつての運動目的の重要な部分が、民主主義共和国において実現されているからである。もちろん、プロレタリア政党にとって、かかる共和国はその固有の目的を実現するための出発点であって、そこからの更なる発展が第一の関心事となる。その際、社会主義政党が単独で強力な政府を作ることは現在のところできないから、ブルジョア政党との協同も実際に試みられなければならない。

さて、こうした社会主義運動の段階説に当てはめてみると、カウツキーによれば、経済的、政治的に最も遅れたロシアは、未だセクト主義の段階に位置付けられる。ロシアの社会主義は様々なグループに分かれていたが、1917年3月の革命でさらに分裂した。彼らは、状況に促されて連立政権に入ることになったが、セクト主義が続けられたため、結局はボリシェヴィズムの勝利を招いてしまった。したがって、ボリシェヴィズムが崩壊した後は、ロシアのどの民主主義政党も社会主義政党も単独で政府を作れるほど強力ではないから、少なくとも社会主義諸政党や諸セクトは一致して協力しなければならない。

では、民主主義的政党と社会主義的政党は、いかなる点で一致できるであろうか。カウツキーは、「彼らが同一の国家形態すなわち議会制民主主義国家を

求めているということはまったく自明である<sup>11)</sup>と断言する。そして、こうして出来た民主主義政権の基本政策をかなりの程度詳しく論述していく。以下では、産業システムに関する民主主義綱領 (demokratische Programm) の各項目の要点を、番号を付しつつ見ていくことにする。

①労働者について。「勝利した民主主義の最重要課題は、西欧各国の仲間たちがすでに持っているあらゆるものを、すなわち、より進んだ労働者保護、しっかりした住宅、経営管理に対する工場委員会の独立、労働組合の完全な自由、失業、病気、障害および老齢の場合ための賃金水準に応じた保障を、自国の労働者たちにもたらすことである<sup>12)</sup>。」

②農民と土地について。原則として、社会主義者は最も重要な生産手段である土地の国有化または社会化を進めなければならない。しかし、農民が自己労働によって土地を所有する小規模農業に関してはそのかぎりではない。一方、大土地所有者については彼らの土地を収用してよい。また、ソフホーズとコルホーズも社会的所有に受け継ぐことができる。

③国有企業については、ロシアがまだ社会主義的生産にとって成熟していないという理由で、これを一気に資本主義化することは、ボリシェヴィキによって行われた突然の国有化という逆の先例と同様に愚かな行為である。必要なのはより強力な「新しいネップ<sup>13)</sup>」であって、経済活動の自由の下で資本主義的企業や協同組合企業や自治体企業が現れてくることである。こうした企業の業績が国有企業のそれよりも優れていれば、後者は手放されることになろう。特に、商業においていち早く私企業が普及するであろう。というのは「商業のほとんどの部門は官僚的な型にはまった仕方ではうまくいかない<sup>14)</sup>」からである。

④自然独占が成立するような部門、例えば鉄道、森林、鉱山、石油のような部門では、国家独占が維持されるべきである。

⑤国有企業においては、労働組合の自由や労働者工場委員会の自由が確保されなければならない。「諜報活動からの解放、共産党員および官僚制の無際限な規定手続による脅威からの解放<sup>15)</sup>」が必要である。国有企業で働く人々の労働の



喜びと労働への理解が深まれば、自然独占以外の部門でも国有企業が生き残ることができるであろう。

⑥「民主主義は急速な経済発展の機会をロシアに与えるが、しかしそれは、あらゆる浪費を回避し、あらゆる手段を生産力発展のために集中させるかぎりでのことである<sup>16</sup>。」われわれは、資本家と違い、学校、病人、失業者に対する支出を浪費とは思わないが、軍事支出についてはこれを浪費とみなす。「ロシアほど軍縮を必要としている国はない<sup>17</sup>。」民主主義綱領の中には、何よりもまず、国際的な軍縮に対する支持が含められなければならない。

以上が、社会主義者と民主主義者との間で合意に達しうるのであろう産業システムに関する民主主義綱領の主な項目である。しかし、ソビエト・ロシアは多民族国家であるため、民族間の対立が民主主義の障害になる可能性がある。そこでカウツキーは最後に、民族問題についておおよそ次のような提案をしている。

全ての民族 (Nation) が自決権を持つべきであるということは全く否定できない。しかし、自決権と主権は概念的に異なっている。民族 (Nation) 間の相互依存性が深まっている今日、主権はむしろ民族 (Nation) にとって危険なものである。「あらゆる同盟、あらゆる通商条約は、根本において主権のある程度の制限を意味している<sup>18</sup>。」ヨーロッパでは欧州連合の創設が課題となっているが、ロシアはすでに統合されているから、ロシア連合の実現は容易である。その際、関税同盟や通貨同盟が重要であろう。そして、通商政策や外交や軍事における連帯も必要であろう。しかし、こうしたことは「教育、徴税、国内行政、裁判権等のあらゆる問題における民族自決 (Selbstbestimmung der Nationen) を排除するものではない<sup>19</sup>。」もちろん、この種の連合は、参加各国の利益に基づくべきものであって、強制的なものであってはならない。

ところで、ここで見てきた民主主義綱領は、民主主義革命がロシアで起こることを前提にしている。カウツキーはそれを「場合によっては起こりうる一事態 (eine Eventualität)<sup>20</sup>」とみなし、恐ろしさを増す苦境の中でロシアの大衆が全く衰弱してしまうことも考えられると述べているが、しかし、生き生きとし

た運動が起こる可能性もあり、それを示す多くの徴候があると記している。

### 3. カウツキーの国有企業改革論について

さて、ここでは以上の整理に基づいて、ダンあての書簡と *Der Bolschewismus in der Sackgasse* として公刊された著書とから見て取れるカウツキーのロシア民主化論の特徴を検討することにした。

書簡で取り上げられた四つの大項目、すなわち農民蜂起、産業政策、民族政策およびセクト主義克服の必要性は、著書においてもその大項目として主要部分を構成し、各項目中の論点も概ね著書に再現する結果となっている。その際、書簡では簡単に触れられていた農民蜂起から民主主義政権に至るプロセスが、著書ではより詳細に展開されている。一方、書簡において国名や人名を挙げて具体的に論じられていた民族政策とセクト主義の問題については、著書では固有名詞を省いてより一般的に論述されている。しかし、こうした相違点は、書簡と著書の性格に由来するものであって、自然な処理であるといえる。これに対して、産業政策については、書簡で取り上げられていた一つの重要な論点が著書においては削除されている。それは、国有企業の限定的株式会社化というアイデアである。カウツキーは、このアイデアに対して自信が持てず、最終的に著書の段階では撤回してしまったものと思われるが、しかしこのような論点の提示に彼のロシア民主化論の特徴を、さらには彼のマルクス主義的な社会民主主義思想の特徴を見ることができる。

マッシモ・サルヴァドーリは、著書『カール・カウツキーと社会主義革命1880-1938』の中で *Der Bolschewismus in der Sackgasse* で示された民主化綱領を取り上げ、その全体にわたる方向性として次の二点を指摘している。すなわち、一つは「ロシアの生産諸関係と生産諸力の現実的水準に全般的に対応していない集産化を“減ずる”こと<sup>21)</sup>」であり、もう一つは「経済それ自体を活気づけるためにあらゆる社会的諸力の民主主義的能力を“高める”こと、そして長期的には社会主義的生産のためのより堅固な基礎を据えること<sup>22)</sup>」である。本稿も、サルヴァドーリのこの指摘を妥当なものとする。そ

して、こうした民主化綱領の方向性を極めて明快な形で表しているものこそ、国営企業の限定的株式会社化のアイデアであると思われる。そこで次に、書簡におけるこの論点の記述をより詳細に見てみることにしたい。

カウツキーが国有企業の株式会社化を持ち出すのは、「企業の国営的性格を解消することなしに企業をより生産的に作り上げる<sup>23</sup>」ためである。もしも「その企業の労働者が株式の一部分を取得する位置に置かれる<sup>24</sup>」なら、「労働者は企業収益に強い関心を持つ<sup>25</sup>」ようになるであろう。ただし「彼らは株式を売却してはならず、また国はその企業を離れる労働者から株式を買い戻さなければならぬ。企業で働いている者のみが、そのような株式を所有すべきであろう<sup>26</sup>。」

このようなカウツキーのアイデアは、彼の息子には受け入れられなかったようである。カウツキーは、この手紙を一番下の息子に読ませたが、この点についてだけ賛成が得られなかったとして、4月21日付の書簡の追伸をすべてこれの補足説明にあてている。それによれば、ロシアでは「工業製品の速やかな値下げ<sup>27</sup>」が必要だが、それは労働者を強制的に駆り立てたり賃金を引き下げたりすることなしに、労働生産性を引き上げることで達成されなければならない。確かに、株式所有という方法以外にもこの目的にかなったものがたくさんあり、自分も以前の著作で示したことがあるが、しかしそれらは相当の時間と費用を要するためここでは問題にならない。また、「直接的な利潤分配制も純経済的には株式所有と同じことを成し遂げるであろう<sup>28</sup>」が、「しかし心理的には恐らく同じようには作用しないであろう。というのは、分配部分は単なる“約束”として現れるが、株式は人が所有するものであり“権利”を付与するところのものであるから<sup>29</sup>。」そして、自分はこのアイデアに固執するする気はないと言いつつも、次のように述べて4月21日付の書簡を終えている。

「われわれは利潤分配制度と労働者の株式所有に絶えず批判を加えてきたが、しかしそれはただ、これらが労働者を資本と“和解”させる手段として推奨されたからであった。その批判は、今日もなお有効である。しかし、私はま

さにこれらの手段を別の目的のために、すなわち、社会主義的生産の内部で生産の収益に対する労働者の関心を高めるといふ目的のために、労働者を急きたてることを不必要にするといふ目的のために推奨するのである<sup>30</sup>。」

さて、以上の記述からわかるのは、生産性向上を目的とした労働者の株式所有というアイデアが、単に安価な工業製品の差し迫った必要性という当時の特殊ロシア的課題に対してだけでなく、国营企業における生産性という普遍的な課題に対して、そして社会主義的生産における労働生産性という本質的な課題に対しても与えられていた、ということである。カウツキーが想定していたソ連崩壊にあたって発生するところの国有化あるいは集団化された産業の取り扱いという問題は、直接的にはロシアに民主主義をもたらすための時局時な作業課題であるが、他面では社会主義的生産の望ましい形態を探るといふ一般的な課題に対しても極めて興味深い実験材料を提供するものとなっている。カウツキーは、1918年以降のボリシェヴィキの成果をほとんどすべて否定しているように見えるとはいへ、しかし一方では民主主義的な建設作業のための「一つの新しい基礎をボリシェヴィキが作ったことは無視してはならない<sup>31</sup>」と記している。これは、直接にはコルホーズとソフホーズに関して述べられたものであるが、同様のことは国营企業についても言えるであろう。そして彼は、国营企業の限定的株式会社化という実験を、十分に実行してみる価値があると主張していたのである。

もともとカウツキーのマルクス主義的社会民主主義において、民主主義と労働生産性の問題は最も重要な論点の一つである。*Der Bolschewismus in der Sackgasse* の英訳版の序文では特にこの点が次のように強調されている。

「労働は最も重要な生産要素である。…この事実はしばしば見落とされるが、それはソビエト・ロシアにおいて最も顕著である。彼らは5年以内に機械の数を3倍にすることによって工業生産もこの短期間で3倍にできると思っている。彼らは機械を管理するのに必要な熟練労働者、職長および技術者の数をいかにすれば5年以内に3倍にできるかといふことは問わないのである。…彼

らは、死活的な問題が労働の能力を高めることであることを、そして、そのような政策が新しい改良された生産手段を作り出す能力を同時に増強させ、労働生産物が自動的に剰余を産出するであろうということを理解し得ない。…なぜなら、労働者の生産能力を増強するこの方法は高度の自由を前提としており、そしてこれは広範囲の民主主義を必要とするからである<sup>32</sup>。」

また、4月21日付書簡の冒頭で言及されているカウツキーの主著『唯物史観』では、ソ連とは異なる本来の社会主義社会における個人の能力開発と生産性との関係が次のように記されている。

「今日、自らの能力を十分に発展させ、自らの特性に応じてそれを用いるための、手段と独立性を持っているのはほんの少数の者たちだけである。ここに、社会主義は根本的な変化をもたらすことになるだろう。…誰もが教育を受けることができるようになることで、各個人が、自らのあらゆる能力を十分に発展させることができるようになるであろう。……人は、かかる能力を生産的労働に用いることができるし、あるいはまた単なる享樂にも、すなわち学問、芸術、自然、スポーツ、遊びといった領域での熟達した享樂にも用いることができる。この意味で、社会主義は人格の自由な発展の前例のない可能性を提供するのである。…階級対立のない社会における各人格の能力の十分な発展とかかる能力を発揮することの最大の自由とは、それを促進することですべての人々が同じ利益を得るのだが、それはこの社会の多様性と生産性をとてつもなく高めることになるにちがいない<sup>33</sup>。」

それでは、社会主義の下での個人の自由な能力開発と社会化された企業での高い労働生産性との間を実際に繋げるものは何であろうか。このように問うのは、当然のことながら、個人の高い能力が企業における高い労働意欲に直接結びつくとは限らないからである。両者の連繋は何によって保障されるのだろうか。この問題に対してカウツキーがさしあたり与えた解答が労働者による株式所有であり、企業収益に対する労働者個人の“権利”の確保であった。このアイディアは最終的には *Der Bolschewismus in der Sackgasse* の民主化綱領に採用されるには至らなかったが、しかし、ここにカウツキーの思想の体

質的な特徴を見て取ることができるように思われる。すなわち、彼にとって、社会主義的生産活動に活力を与えるものは、政治的民主主義においてと同様、個人の権利意識だったのである。

- 
- 1 International Institute for Social History, Amsterdam, Kautsky archive, G 15, 8-17.  
以下の注では Kautsky G 15, 8 のように表記する。なお、この書簡の 1 ページ目には、右上に 22. April という印字がみられる他、Wien, am 23. April 1929. という印字の 23 の部分が手書きで 21 に直されている。ステーションソンの『カール・カウツキー 1854-1938—古典時代のマルクス主義』（時永淑・河野裕康訳、法政大学出版局、1990 年、432 ページ）で取り上げられている「テオドール・ダーンあての手紙（1929 年 4 月 23 日付）」はこの書簡と同一のものではないかと思われるが、本稿では 4 月 21 日付の書簡と表記することにする。
  - 2 Kautsky G 15, 39-43.
  - 3 Kautsky G 15, 54-61 a.
  - 4 Karl Kautsky, *Der Bolschewismus in der Sackgasse*, J.H.W.Dietz Nachfolger, G.m.b.H., Berlin, 1930. 以下、注では BS と略記する。
  - 5 Kautsky G 15, 13.
  - 6 Kautsky G 15, 13.
  - 7 カウツキー自身の研究活動において民族問題は大きな位置を占めていた。相田愼一『カウツキー研究—民族と分権』昭和堂、1993 年、同『言語としての民族——カウツキーと民族問題——』御茶の水書房、2002 年、参照。なお、カウツキーが用いる Nationalität, Nation および Volk の訳語については、それぞれ民族、国民および人民とするのが良いようであるが、本稿ではすべて“民族”の訳語をあて、それに原語を付記することとした。この点に関しては上掲『言語としての民族』の序章を参照。
  - 8 BS, S.91 f.
  - 9 BS, S.104.
  - 10 BS, S.111.
  - 11 BS, S.133.
  - 12 BS, S.134.
  - 13 BS, S.136.
  - 14 BS, S.137.
  - 15 BS, S.137.
  - 16 BS, S.142.



- 17 BS, S.142.
- 18 BS, S.147.
- 19 BS, S.148 f.
- 20 BS, S.150.
- 21 Massimo Salvadori, *Karl Kautsky and the Socialist Revolution 1880–1938*, Translated by Jon Rothschild, Verso, London/New York, 1979, p.306.
- 22 Ibid.
- 23 Kautsky G 15, 15.
- 24 Kautsky G 15, 14–15.
- 25 Kautsky G 15, 15.
- 26 Kautsky G 15, 15.
- 27 Kautsky G 15, 16.
- 28 Kautsky G 15, 16.
- 29 Kautsky G 15, 16.
- 30 Kautsky G 15, 16–17.
- 31 BS, S.138.
- 32 Karl Kautsky, *Bolshevism at a Deadlock*, Translated by B. Pritchard, RAND SCHOOL PRESS, New York, 1931, pp.13–14.
- 33 Karl Kautsky, *Die materiariistische Geschichtsauffassung Dargelegt von Karl Kautsky: Gekürzte Ausgabe, herausgegeben, eingeleitet und annotiert von John H. Kautsky*, Verlag J. H.W. Dietz Nachf. GmbH., Berlin/Bonn, 1988, S.661.

(付記) 本稿は経済貿易研究所 2000 年度海外出張旅費に基づく研究成果である。